仏塔の生成とその信仰の展開

杉本卓洲

皆さん、今日は。

ここに「仏塔信仰の生成」としましたが、信仰の生成というのはおかしいので、「仏塔の生成とその信仰の展開」という題目にかえさせてもらいます。生成という言葉はサリンの生成といわれたりするように、ものを作り出すことを意味します。ですから、仏塔がどういうふうにして生まれ成り立ったのか、それからその仏塔に対してどのように信仰が展開されたのか、そのように分けてお話したいと思いまして、コピーをお渡ししました。

まず仏塔というのは、非常にユニークなものでして、ヒンドゥー教やジャイナ教と違って遺骨崇拝、「舎利へのこだわり」が基本になっております。ですから、そういう遺骨崇拝がインド考古学上、歴史学上、どういったところから生まれてきたのか、ということを探ると、仏塔がどのようにして出来たのか、ということが分かるわけです。しかし、この遺骨崇拝というのが、なかなか考古学的に探すのが難しいんですね。たとえば「ガンダーラ墓制文化」というのがありますけど、そこには火葬した後に遺骨を壷に納めて墓に埋葬するという作法があります。しかし、それが大きな特徴かといえばそうではなく、その同じ場所に別の葬法があってですね、必ずしも遺骨崇拝が抜きんでていたり、重要視されているわけじゃないんですね。

それから、ウッタラ・プラデーシュ州とかビハール州とか仏教が栄えた地域の考古学的な遺跡、特に「巨石文化」、

大きな石を積み立てたり載せたりして造るもの、沢山の石を積み上げて造る「積石塚」、そういうものを調べてみても、葬法が違っていたりします。一旦死体を晒しておいて、骨だけになったらその骨を洗って土に埋めるという方法であったりします。火葬の後の骨を壺に入れて埋葬する、という方法に必ずしも定まっていません。ビハール州には、火葬後の骨を埋めた墓が発見されているのですが、舎利壷みたいなものが出て来るわけではないんですね。ですから、仏陀の舎利供養、仏陀の舎利崇拝というのは、どこから出て来たのか、考古学的に探るのがこれからの非常に大きな問題だと思います。そういう遺骨崇拝という点で、仏塔の起源というのは非常にまだ謎に満ちている。それでここに「謎多きもの」というふうに揚げたのは、そういう理由からなんです。

それから、お釈迦さんが涅槃に入られる前に、アーナンダがご遺体をどのようにしたら良いでしょうか、とお伺いしますね。そしたらお釈迦さんは、私の遺体は転輪聖王の葬法でしてほしい、と答えられるんですね。それで、転輪聖王の葬法といったようなものが当時あったのかというと、これまた問題になります。非常に勝れた偉大な王の墓というものが当時あったのか否か。その偉大な王の墓を発見することは、インダス文明期でも考古学的に難しいですね。エジプトならピラミッド、黄河文明なら陵ですね。日本なら古墳です。偉大な王たち、支配者たちの墓が汎世界的に認められるのに、インドだけは、壮大な王墓とか神殿とかが発見されていない。これまた非常に大きな謎です。

また、どうしてお釈迦さんのお骨を祀った仏塔だけが、ああいうふうに大規模に造られて、アショーカ王の墓がなぜ作られていないのか、これを皆さんから解答していただきたい、と思うんですね。インドでは偉大な王が沢山いたはずなのにどうして王の墓がなくて、お釈迦さんの墓だけがあんなに優れた立派なストゥーパとして造られたのか、私はそれが非常な謎だと思っています。イスラームが入ってきて、イスラームの王たちの壮大な王墓、聖廟ができたわけですけど、イスラーム以前の王たちの墓というのは、なかなか見つからないのです。インドの考古学がいまだ不十分だからといえるかもしれませんが、出て来てもよいと思うんです。

それから、転輪聖王の葬法のなかで、火葬後の骨を四辻のところに祀るというのがありますが、これもちょっと変わった祀りの方法ですね。四辻というのは非常に賑やかなところです。ですから、仏塔というのは非常に賑やかなところに造ることになるわけです。

次に、仏塔の生成に先行するものとして、「シュマシャーナ・カラナ」というのをあげましたが、シュマシャーナという名の墓の製法ということですね。これはブラーフマナ文献とか『シュラウタ・スートラ』とかに出てきます。それで、そのシュマシャーナという墓を調べてみると、そういう墓は人から見えないところに作れ、と書いてあります。奥まったところで、人がたやすく見える場所には作るべきではない、としています。仏塔を四辻に造るというのとは大きな違いがありますし、非常に異質なんですね。

それから『ラーマーヤナ』のなかに、ダシャラタ王とかラーヴァナ魔王の葬儀の模様が出てきますけれども、遺体というのは不浄なものであるから左回りに回るんですね。ところが仏陀の遺体は右回りに回る、ということになっていて、仏陀の遺体はとても清らかなものとされているわけです。

それから、シュマシャーナという墓は四角か方形に作るといわれます。それはなぜかというと、神々は方角をもっているからだといいます。神々がアスラたちと戦ったときに、アスラたちを追放して方角のないものにした。それで神々に属する人たちは方形の墓を作るが、アスラに属する人たちは方角のない円形の墓を作るというのです。アスラに属する人たちとは、東方の人たちとされます。彼らはチャムーという壷か函のような入れ物に遺骨を入れて祀るが、神々に属する人たちは遺骨を直接土のなかに入れるといいます。方形の墓がアーリヤン型、正統な墓で、円形の墓が異端型の墓なんです。

シュマシャーナという墓は、クシャトリヤが一番大きく作る。手を伸ばしたくらいの高さに作る。それからバラモンは口の高さ、女性は母胎の高さ、ヴァイシュヤは腿の高さ、シュードラは膝の高さに作る。そのように階級によっ

て違う。クシャトリヤすなわち王のが一番大きいことになります。女性のも大きい。そして、その墓はどうも土塊つまり土の固まりで作ったようです。煉瓦を少し使ったようですけど、あまりはっきりしません。煉瓦を鳥のかたちに並べるとか、十三個の煉瓦を使うというのが書いてあるんですけどね。その墓は作った後、後ろを振り返らずに帰ってくる。その墓はそれっきりで、その後崇拝されることは全然ないんです。墓を作った後人々は帰って来ますが、村の入り口のところに土の団子を作って道に置くんですね。それは、生きている人と死んだ人との世界を区別するためです。その土の固まりは山であって、死んだものが生きている人たちのところへ来ないようにするための土盛りなんです。そういうふうにして、お墓はもう見向きもしない。汚らわしいものであって、放棄の対象なんです。仏塔のように崇拝の対象となることはないんです。このシュマシャーナという墓は、今のところまだ発見されていないんですね。私が勉強不足だから知らないだけかもしれませんが、発見される可能性は少ないでしょうね。こういう文献上の記事から仏塔の起源を考える場合、アスラたちの円形の墓が一つのヒントになりますけど、仏塔がアスラたちの墓から由来していると見るのは、一つの推定としても面白い見方といえますよね。

それで、その仏塔は、皆さんご存知のように、半円球型をしています。その半円球型のもの、土饅頭ですね。それが仏塔だと一般には認識されていますが、しかし、そうではない。柱が本当は仏塔の本体なんだ、という説が最近出ているんですね。まず柱が建てられ、その柱を支えるために土盛りがなされた。確かに古い塔をよく調べてみると、中心のところにパイプ状の穴が開いていたり、木の柱の腐ったのが入っていたりするんです。ですから、仏塔というのはその土饅頭つまり円墳だけで出来ているのではなくて、本当は大きな柱が先ず建てられて、いろんな祭祀が行なわれたのではないか、というのです。そして、その柱の崇拝が仏塔信仰へと展開したのではないか、という説なんです。インダス文明期にも柱崇拝のような模様が見られます。アショーカ王の石柱なんかと結び付くし、柱崇拝はインドラ信仰が代表的ですね。インドラを柱で信仰する。これはネパールでは今でも生きていますね。仏塔はこうした柱

信仰から発生をみた、というのです。まあ、仏塔の起源については数多くの説があります。屋根やテントから来たとか、家の模倣だとか、いろいろありますが、最近では柱説が非常な脚光を浴びています。

それから、「ウパニシャッドから仏教へ」というのは哲学的な問題として問われますが、考古学的、神話学的な問題として問うと、「聖火壇から仏塔へ」というのが考えられます。仏塔の一番下のところには、煉瓦で花模様、蓮華の模様、車輪の模様を作ったり、スヴァスティカという逆卍型に煉瓦を並べたりして、その上に煉瓦を積み重ねて仏塔を作る、そういうのがあるんです。聖火壇も煉瓦を重ねて作るんですね。そしてその場合、『シュルバ・スートラ』という経典にバラモンたちが作った建築法、祭壇の構築法がちゃんと規定されておって、煉瓦の寸法とか組み立て方とかが非常に整備されております。そのなかに華型、車輪型、逆卍型などが見られ、仏塔がその影響を受けたであろうことは十分考えられます。そういう聖火壇のなかで一番大きく作るのが、鳥のかたちをした聖火壇なんですが、それは宇宙の創造主プラジャーパティを再生・復活させるために作られるんです。皆さんご存知のように、『リグ・ヴェーダ』のなかに「プルシャ・スークタ」、プルシャという宇宙の原人が神々によって犠牲にされた結果、彼の身体がバラバラとなり、彼の口からはバラモン、腕からはクシャトリヤ、腿からはヴァイシュヤ、足からはシュードラが生まれて、眼からは太陽が、耳からは方角が出て、さらに鳥や獣などがみな出てきたという話がありますね。それで、その聖火壇を築くことは、そのバラバラになったプルシャ、プラジャーパティと同じなんですけど、彼の身体を元通りに再生・復活させるのだ、というのです。

それで、そういう考えと関連あるのではないかと思うんですが、お釈迦さんの身体は、プラジャーパティの場合とは逆に、一つにされずにバラバラにされた。しかしそれが、『法華経』において、お釈迦さんの舎利を全部集めて、多宝塔というものに皆集まって来たという話がありますね。お釈迦さんも再生・復活したといえます。

まあ、こういうふうに仏塔の生成については、いろいろと考古学的な面と文献の記載とから攻めていかないとなら

ないんです。シュマシャーナも聖火壇も、その問題を追求する際の筋道の一つというだけであって、もっともっと他のところから攻めて行って、仏塔の起源を探るべきだと思います。まだまだこれは、「謎多きもの」として残っております。

それで、仏塔に対する信仰の展開がいろいろとなされるようになる。仏・法・僧の三宝を敬うことが、仏教徒の信仰の証しといえますが、最初は仏陀と、その仏陀の教えですね。二宝が仏教徒の信仰する対象だったんです。仏陀が生きておられる間は、仏陀を慕って、仏陀を鏡としてその跡を辿っていけばよかったわけですけど、仏陀が亡くなられた後は、その支えを失うわけですね。「私なき後は、私が教えた法と律とが師である」とか、「私を頼りにするな。法を見よ。そうすれば私を見ることになるんだ」とか、あるいは「他に頼るなかれ。自己および法に頼れ」という遺訓というか、遺言を述べて仏陀は逝かれた。仏陀は自分を信仰の対象にしたり、しがみついたりすることは自分の本意ではない、とした。それで、その仏陀の遺体も、お坊さんは問題にすべきではない、そんなものにすがりつくものではない、といって涅槃に入っていくわけですね。ですけど、アーナンダはそれだけでは気がすまない。そこで、どうしてもお釈迦さんの遺体、舎利を祀りたいという心情で、何回も何回もご遺体をどうしたらいいんでしょうか、としつこく聞くんです。

そうすると、さっきお話ししたように、転輪聖王の葬法に従え、というわけですね。そして、私の葬儀は私を信仰するクシャトリヤやバラモンたち、あるいはヴァイシュヤの人たちがやるから、お前たちはやらなくともいい、かかずらわなくともいい、というのです。ですから、アーナンダにもともと語らなくともいいはずなんですね。すでにもうクシャトリヤやバラモンたち、あるいはヴァイシュヤたち、信仰している人たちが葬儀の方法をちゃんと知っているわけだから、アーナンダに説明する必要がないのに、くわしく説明している、これはおかしいですよね。アーナンダがその教えを受けて、彼が指揮をとって、クシナーラーのマッラ族の人たちに、ああやれ、こうやれ、と葬儀の手

順を教えているんです。だから、アーナンダは、かかずらうなといわれたのに、かかずらっているわけです。仏陀の方も、自分の葬儀なんか知っている人が沢山いるのだから、彼らに任せればいいといいながら、自分の葬儀次第を詳しく説き示していますね。だから、非常に矛盾しているわけです。

そういうわけで、この『マハーパリニッバーナ・スッタンタ』（ブッダ最後の旅）という経典の内容は矛盾だらけです。舎利八分伝説というのも矛盾だらけです。皆さんは大体史実だろうと思っていらっしゃると思うんですが、多くのフイクションが込められている。どこまでが真実なのか、疑問なんですね。

先ず、舎利が八分されたというのは、本当かどうか。それを証明するものとして、ヴェーサーリー塔とピプラーワー塔の発見があげられますね。そのうちヴェーサーリー塔は舎利がなくて、灰、砂だけが入っていました。舎利を納めた塔ではないんですね。ピプラーワー塔からは舎利壺が出ました。それには碑文が刻まれていますが、その読み方が問題なんですね。この壺のなかの舎利は仏陀の舎利であると読むよりは、仏陀の親戚の人たち、つまりシャカ族の人たちの遺骨である、と読む方が自然なんですね。すんなり行くんです。この舎利は仏陀のものだと初めにいってしまうと、その後に仏陀の親戚の人たちの「奉祀したものである」とか「寄進したものである」というように碑文にはない文章で補足しなければならない。あるいは括弧つきで説明する必要があります。ですから、ちょっと無理な訳なわけです。でもお釈迦さんの舎利とした方がやはり格好いいですね。お釈迦さんの舎利にしないと、お釈迦さんが歴史上の人物にならなくなります。だから、お釈迦さんの舎利だと主張する人が圧倒的に多い。お釈迦さんの舎利ではなくて、親戚の人たちの遺骨だと解釈する学者は、フリートという人とシルヴァン・レヴィという人ぐらいしかいませんね。玄奘の『大唐西域記』のなかには、この仏陀の親戚の人たちの遺骨を納めた塔について、詳しく物語られています。仏陀の舎利塔については何も伝えていないんです。

またこのピプラーワー塔が発見されたのが非常に古い。一八九八年にペッペという人によって発見されたんですが、

その発掘調査の報告書が紛失してしまって、詳しいことが分からないんです。そこで一九七一年から七四年にかけてシュリーワシュタワという人が再発掘した。そうしたら、そのペッペが掘った場所よりさらに深いところに、また別の煉瓦作りの部屋があって、そこから新しい舎利容器が二つ発見された。そこでシュリーワシュタワは前に発見されたものはレプリカであって、自分が新たに発見したものこそ本物だ、ペッペが発見した舎利壷は本物でない、といっているんですね。それで、真相が本当に分からなくなった。

ですから、舎利八分伝説が本当だというには、ヴェーサーリー塔、ピプラーワー塔の外にもう二つか三つほど発見されて欲しいんですよね。そうしないと、まだ証拠不十分で物足りない。

また八という数がそもそも怪しいんですね。なぜかというと、お釈迦さんが亡くなられた時に八種の大地震が起こったとか、八部衆の集いがあって、それぞれ皮膚の色が異なっていたのを、お釈迦さんがそれらの色を変えて彼らに教えを説いたとか、それから、八勝処という八つの勝れた場所があるとか、八種類の解脱があるとか、このように八という数がこの『マハーパリニッバーナ・スッタンタ』のなかには沢山出て来ますね。八という数は、経典の作者、編者たちの好みの数であったんですね。八とは、一つのまとまり、全体、超絶性などを示すといわれますが、あるいは正義、公平、高貴、豊かさ、幸運、吉兆などを表わす特別な数なんです。そこで好まれて、八つに集めたのではないか、と思うんです。

それから、その八つのなかに、歴史上無名の人たちが入っているんですね。ヴェータディーパのバラモンたちとかアッラカッパのブリ族とか、そういうのが出てくるんですね。特にヴェータディーパのバラモンたち、パーリ本では「あるバラモン」とされているんですけど、バラモン一人だけで他の七部族と対抗する、舎利の争いのなかに割って入る、一人だけで武器をもって争うというのは合点がいきませんね。確かにバラモンも武器をとって争ったことが『マハーバーラタ』などに出てくるから、バラモンが争うことも可能性があるかもしれませんが、一人のバラモンが

舎利争奪戦のなかに割って入ったというのは、ちょっと疑問です。私は漢訳の方に従い、「バラモンたち」と複数に解します。

そして、外の七つの部族は、「私たちはクシャトリヤである、仏陀もクシャトリヤであるから、その舎利の分け前を受け取る権利がある」というのに対して、ヴェータディーパのバラモンは、「私はバラモンである、仏陀もバラモンである。だから舎利を受ける権利がある」というんですけど、なにか不自然ですね。やはり漢訳経典の方の、「仏陀は私たちの敬愛する師であるから、舎利を下さい」といってきたとある方が、ふさわしいですね。

それから、マガダ国のアジャータサットゥ王の大臣であるヴァッサカーラが最初に舎利を取りに駆け付けてきた、と書いてありますね。ですけど、マガダ国は一番遠いんです。それはおかしいんで、やはり漢訳の方にあるように、クシナーラーに一番近い、隣接していたパーヴァーのマッラ族が最初に駆け付けてきた、という方が自然ですね。それから、舎利八分が終わった後に、ピッパリヴァナのモーリヤ族というのがやって来た、というのがあるんですが、これもなにか作為的というか、フイクション的というか、そういうものが入っているのではないか。パーリ経典には、お釈迦さんの遺体が火葬された後は、遺骨つまり舎利だけが残り、灰も肉も血も何も残らなかった、というふうに書いてありますね。だから、灰が残っているわけがないんです。灰をもらって「灰塔」を建てたというのは、おかしいんです。灰ではなくて、炭とすべきです。それで、漢訳経典の方を見ると、モーリヤ族ではなくて「バラモンたち」がやって来て、皆はもう舎利がなくなっているのを承知で来ているんです。舎利はいいから、火葬の薪の炭を私たちはもらいに来ました、というふうになっているんです。初めから舎利は問題でなくて、炭が欲しいというのです。炭を基にして「炭塔」を建てて崇拝したというのは、非常に深い信仰を表わしていますね。舎利にこだわらないという点で、また炭でも信仰するということで、お釈迦さんに対する絶対的な信仰が表明されているわけです。そういう意味で、この舎利八分伝説はお釈迦さんに対する非常な信仰の深さというか、お釈迦さんを慕う気持ちの深さを証明し

ている物語で、後世の作品といえますね。

さてその史実性というのは、初めは遺骨崇拝という習俗をもつていた部族、先ほど述べた無名の部族や後でお話するナーガ族とかが隠しもっていて、後で有力な部族たちもそれに倣うようになった、といえるかもしれません。それも八つというわけでなかった。この八つの国々の対立というのは、実は四つの国々の対立を合わせたものということが出来るんですね。マガダ国はガンジス河をはさんで、ヴェーサーリーのリッチャヴィ族と非常にはげしい対立をした。クシナーラーとパーヴァーのマッラ族はカクッター河をはさんで、ラーマガーマのコーリヤ族とカピラヴァットゥのシャカ族とはローヒニー河をはさんで、それぞれ対立しあっていた。アッラカッパとヴェータディーパとは分からないんですけど、並立していたことは分かっています。そういう四つの組合せが合わさって、八つにされた。それで、それらはお互いに喧嘩しあっているわけですね。そこで、「仲良くしなさい。喧嘩をするな。お釈迦さんは忍耐を説いた方である。その忍耐を説いた方の舎利を基にして争うのは良くない」といって、ドーナというバラモンが皆を諌めるんですね。これは仏教の非戦主義、非暴力主義、平等・平和主義といったものが、この物語のなかに込められていた。非常に面白い教訓を含んだ物語になっているわけです。ですから、舎利八分伝説には事実とフイクションとが非常に織り交ざっておって、どこまでが真実で、どこが創作、作為的な部分か、というのを探るのも一つの大きな問題となりますね。

次に、アショーカ王がその八分された舎利を七つ集めて、八万四千の仏塔にそれを分配したというわけですね。それはもちろん誇張でしょうけれど、玄奘の『大唐西域記』をみると、一二〇余ほどアショーカ王が建てた塔があったと伝えられています。まあ、沢山の仏塔を建てたことは間違いないでしょう。ところでその時に、一つだけ舎利を取れない塔があった。それはラーマガーマのコーリヤ族の建てた塔です。それはナーガ族が守っていた。コーリヤ族とはナーガ族でもあった。ナーガ族は遺骨崇拝、仏塔崇拝に非常に熱心であって、アショーカ王が彼らから舎利を取ろ

うとしたけど果たさなかった。なぜなら彼らの崇拝がすごく立派であって、自分の崇拝は彼らのそれに到底かなわないというので、そのナーガ族の守っていた塔からは舎利を取ることは出来なかった、というんですね。そういうわけで、ナーガ族の塔、すなわちコーリヤ族のラーマガーマの仏塔というのは、もし発見されれば、そこには舎利が手付かずにいっぱいあるかもしれませんね。皆さん、インドに行ったら、それを探して見つけてきてもらいたく思いますね。お釈迦さんの本当の舎利が、燦然と輝いて出てくるかもしれませんね。

アショーカ王が仏塔をどのように信仰したか問題ですけれども、私は次のように推測しています。

アショーカ王は、祭りが嫌いだった。ですけど、「善い祭り」は認めている。それはどういう祭りかというと、天の宮殿とか、象の光景とか、火の群がりとか、天上のいろんな光景を民衆に見せるものだ、というんですね。象の光景とは、象の行列ですね。象にいろんな装飾を施して象の行列をする。火の群がりとは、松明とか蝋燭の火を沢山点して、夜の祭りをなす。それはそれはきらびやかにして、天の光景というものを民衆に見せる。そういう祭りです。そういうのは現在スリランカで、仏陀の歯骨祭りとしてやられていますね。そういうものに似たものを、アショーカ王もやったんじゃないかと思うんです。それは「ストゥーパ祭り」と呼ばれて、仏塔の模型みたいなもの、あるいは舎利容器を象の背中に乗せてですね。行列を作って、王は自分自身がブラフマーとか、あるいはシャクラ・インドラになって、仏陀に付き添う神となり、地上をあたかも天上の世界のように美しく飾りたてる。お前たちも善い行ないをしたならば、死後にこういう美しい天界に生まれることが出来るんだぞ、だからいいことをしなさい。私は今その天界をこの地上に表わし示しているのだぞ、と。そういう「ストゥーパ祭り」を通して、天の世界と地上の世界とを合体させる。非常にきらびやかにして、人々を彼の世に行ったような気分にさせる。そういう祭りを行なったのではないか。

それから、仏塔の祭り方にはヤジュニャやプージャーとは別の、「マハ」という祭りがなされた。漢訳の方では

「会」と訳されますね。五年大会とかいう時の大会ですね。そういうものと仏塔とは非常に関わりが大きいですね。仏塔を行列をなして祭った後、沢山の坊さんたちが集められて、討論会みたいのがあって、その時には神通力比べも行なわれる。そこで勝利を得たものは表彰される。そういうものの先駆的なものを、アショーカ王時代に求められないか。推定ですけどね。

仏塔に対しては、実にいろんなことが求められて信仰がなされた。健康とか病気にならないようにとか、長寿とか、あるいは財産の獲得とか、現世利益的な信仰ですね。また、心を清めるために祈られる。仏塔を崇拝するものは心が清められる。そして、天界に生まれることが出来る。さらには、涅槃獲得のために仏塔を崇拝する者もいる。これは碑文に記されているもので、説一切有部とか西山住部とか、大乗ではない人たちによって祈願されている。また、仏塔崇拝は菩提を得るための行とされ、その悟りを自分だけが得るんではなくて、他の人たちも得られるように、と祈って仏塔を崇拝するんですね。また、こういうのもあります。私の舎利も仏陀のそれと同じように祀られて、皆に崇拝されて、皆が天界に生まれることが出来ますように、涅槃が得られますように、と。そういう誓願がなされて仏塔崇拝がなされるんですね。このようにして最終的には、皆仏陀になる、とされるわけです。だから、仏塔崇拝とは、究極的には仏に成ることを意味しているわけです。忘れてならないのは、これらがみな必ずしも大乗の説と決まっていないことなんです。

次に、前にも触れましたが、仏塔信仰が比丘たちに禁じられたか否かの問題ですね。仏陀の舎利供養などには関わるな、とあるから禁じられたんだ、と一般には理解されていますね。比丘たちは仏塔崇拝なんか問題とすべきではない。しかし、それを守れた人は何人いたか、非常に疑問ですね。アラカンの道を歩む比丘たちのあいだにも、修行や信仰の程度に差があってですね、アラカンになれる人は何パーセントでしょうかね。前に、南方上座部のお坊さんに、アラカンになれる人は何パーセントぐらいいるんでしょうか、と聞いたことがあるんですけど、そうしたら首をまげ

て笑われてしまいました。アラカンの道を歩む人たちのあいだにも、アラカンになれる人は少数で、多くは天界に生まれる化生の人になるか、仏陀に対してひたすらな信仰と愛を捧げるだけの比丘もいる。日本でも禅宗の坊さんが、みんな座禅ばかりやっているかというと違いますね。祈祷を一生懸命やっている。だから、比丘は仏塔崇拝なんかしない、などとはいえませんね。

また、戒律があるからしなかった、というんですが、そうではなくて私は反対に、やっていたから禁止されたんだ、あまりに熱心に信仰し、いろいろと問題が生じた結果、お前たちはこういうものにかかずらわないで、自分たちのやるべきことをやりなさい、あるいはやるべきでない、と定められた、とこのように逆に私は解釈したいですね。仏塔祭りの時には音楽、伎楽を供養する。「伎楽供養を比丘はしてはならない」という戒律があるなら、それは比丘たちがやっていたからそういう戒律が出来たのであって、そういう比丘たちがいなかったら、戒律に定められるようなことはないんですね。比丘たちがやっていて、これはちょっとまずいということで戒律が制定されたのであって、戒律が前にあって、それで比丘たちがやらなかった、というふうにはならない。

さらに、戒律がみな守られていたかというと、これまた疑問ですね。たとえば、仏塔や僧院には男女の合体像を描いてはいけないとあるんですけど、それは皆さんもご承知のように守られていませんね。

それから、比丘尼たちが非常に熱心に仏塔崇拝をしたようです。自分たちの先輩で尊敬していた比丘尼が亡くなった時に、彼女のための仏塔を作った。たまたまそれを比丘たちの住む僧院のなかに作った。そうして、皆それを拝んでいたんですね。そしたら、一人の比丘がうるさいというので、その塔を壊してしまった。そこで、比丘尼たちは怒って、その比丘を殺してしまえ、ということになった。ところが、その話を耳にしたウパーリという比丘が、その先程の塔を壊した比丘にそのことを伝え、早く逃げるように教えた、という話があるんですね。それで、お釈迦さんがこの話を聞かれて、比丘たちの住むところに比丘尼が入ってはならない、という戒律を定めたんですね。仏塔を建て

てはならない、ということは何も問題になっていないんです。仏塔を建ててはいけない、というのが定められているのは、法蔵部の『四分律』だけに出てくるんですね。「在僧寺造塔戒」というものです。比丘たちの住んでいる僧院には塔を作ってはならない。だけど、比丘たちのいない僧院ならば作ってもいいし、あるいは塔のあったところに僧院を作ってもいい、という戒律が出来たんですね。

それが五番目のことに関連してくるわけですが、僧院と仏塔というのは本来別々にあるのが原則なんですね。僧院は坊さんたちが経典を読んだり修行するところで、仏塔は在家の信者たちの信仰の場ですが、坊さんたちも比丘尼たちも礼拝しに行く。僧院の方はどちらかといえば僧たちの独占物ですが、仏塔の方は共有物です。僧院にも布薩の時などは在家の信者たちも入られたんですけど、共有とはいえませんね。

それで、僧院と仏塔とは別々なんですが、西インドの石窟寺院を見てみると、たくさんの僧院があって、そのなかの真ん中とか端っことか、きまっていませんけど、仏塔を祀った塔院がある。それは別々であって、混ざり合うことがないんですね。ところが、いつの間にか仏塔の祀られている塔院のなかに坊さんたちが入りこんで行って、塔院のなかに部屋を作って住み着くようになる。それから逆に、僧院の方に仏塔を持ち込んでくるようになる。僧院のなかの壁に仏塔を刻んだり、あるいは仏塔のための特別の部屋、祠堂を作ったりするようになる。そうすると、「僧房つきの塔院」、それから「仏塔つきの僧院」といった具合に、僧院と塔院との合体したものが出来てくる。それが「塔寺」というものに当たります。仏塔を抱え込んだ僧院ですね。それで、そういうものを初めて作り出したのが大乗仏教徒ではないか、といわれるわけなんですね。ところが、それが証明されるか否かというと、なかなか出来ないんですね。僧院のなかに仏塔を持ち込んでいるのは、碑文で明らかなのは賢胄部という部派ですね。その部派の教師たちのためにと、僧院の中央の壁に仏塔が浮き彫りされているんです。また法上部では、それは僧院のなかではないのですが、その玄関に仏塔がやはり浮き彫りされているんですね。そのように、賢胄部とか法上部とかに属していた坊さ

んとか尼僧たちが、仏塔崇拝に熱心だったことが分かるだけですね。

ところで、法蔵部の『四分律』のなかに、「比丘は仏塔のなかに住むべからず」という戒が見えるんですが、その仏塔のなかに住むということの解釈が難しい。常識的には不可能ですね。しかし、塔院のなかに住むべきでないと解釈すると、非常にすっきりするんです。ベードサーというところの、紀元前一世紀ぐらいの非常に古いものなんですが、そこの塔院のなかにはちゃんと僧たちの住む部屋があって、坊さんたちが塔院のなかに進入していった跡が認められます。それで、さっきの戒律の文と合わせて考えると、そのように坊さんたちが塔院のなかに住み込んでいったことがあったので、それは好ましくないというので戒律が定められた、と解釈できるんですね。

こういう戒律が出来たんですけど、どの部派か分からないんですが、段々と仏塔を僧院のなかに持ち込んだり、あるいは塔院のなかに僧たちが住み込んでいくようになる。そういう仏塔つきの僧院、僧房つきの塔院というのが紀元後三世紀から四世紀にかけて沢山出来てくるんです。そういうのがみな大乗仏教徒の仕業だ、などとは断言できないんですね。大乗仏教は仏塔崇拝を母胎にして成立したとか、大乗仏教の源流は仏塔供養だ、などとは何の証拠もなくていえないんですね。部派仏教に属する僧たちのなかにも、仏塔崇拝に非常に熱心な人たちが沢山おった。何も大乗仏教徒たちだけが特に仏塔に親しかった、とはいえないんですね。

『般若経』は大乗仏教のなかで最も古い経典といえるものですが、沢山異本がありますね。それらを古い順に並べていって、古いものと新しいものとの内容を比較し検討してみると、古い方では、仏塔や仏舎利の信仰よりは自分たちが創作した経典を崇拝する方が功徳がはるかに上だ、経典崇拝をしなさい、ということが強調されている。ところが時代が下がって新しい本になると、経典崇拝から仏塔崇拝に変わって来るんです。

経典崇拝というのは、金の板や綺麗な布に経典を書き写して、それを宝石製の箱のなかに納めて、それを台座の上に載せて、花をあげ灯明を点し、旗を揚げたりして供養する、というものです。それはちょうど火葬後、仏陀の舎利

がクシナーラーの宮殿に運びこまれて、壷に納められて台座に載せられて供養されたんですが、その光景と非常に似ています。このように台座の上に箱に納められて祀られた経典が、後になってくると、仏塔のなかに納められて祀られ供養されるようになるんですね。台座に上げられていたのが、仏塔のなかに入れられるようになるんです。そういう意味で経典崇拝も後には仏塔崇拝のなかに取り込まれてくる。

さらに、こういうことが書いてありますね。般若波羅蜜が書き留められて供養されたところは「チャイティヤ・ブータ」だ、というんです。すなわちチャイティヤとは聖地とか仏塔のことで、ブータとは「そのようになったもの」、「等しきもの」とか「そのもの」とかを意味しますので、「聖地あるいは仏塔となったところ」とか「聖地か仏塔に等しいもの」とか「聖地あるいは仏塔そのもの」ということになります。だから般若波羅蜜が書き写されたところ、つまり般若経が創作されたところは仏塔の建てられるところとなり、巡礼すべき聖地となる、というわけなんですね。これは『法華経』の場合でもそうですね。仏舎利の崇拝よりは「正法白蓮華」、「サッダルマプンダリーカ」という名の経典の方が重要視されるべきであって、その経典を説いた人すなわち法師たちが住んでいるところに仏塔が建てられるべきである、舎利がなくともそれこそが真実の仏塔だ、と主張する。このように、仏よりは法に重きを置き、自分たちが新しく創作した経典の功徳の大きさを吹聴する。いってみれば、もう仏舎利は手にはいらなくなったので、自分たちの創りだした経典こそが仏舎利の代わりとなり、それを供養することが仏舎利塔への供養よりは何百倍もの功徳があるんだぞ、というわけなんですね。

それから後になると、その経典のなかの一偈だけでもよいから、それを書き写して供養すれば大きな功徳があるといって、土でこねたテラコッタ印章や煉瓦に刻みこんで、それを仏塔のなかに納める。そういうのが沢山出てくるんです。その経典のなかの一偈というのは、多いのが「法身偈」あるいは「縁起法頌」といわれるもので、大乗経典の最後に記されているものですね。それが仏舎利に代わって、法身舎利として仏塔に入れられて礼拝される。

仏舎利は仏舎利として貴重なんですけど、「仏舎利は般若波羅蜜から生まれたものである」とか、「仏舎利は法身によって、あるいは般若波羅蜜によって生かされるのだ」といわれたりします。だから、仏舎利の供養も否定しないんですけど、経典の方こそ法身だとして、仏舎利や仏塔を二次的というか、一応措いておいていた。それが後になって結びつけられた、といえるんですね。

仏塔崇拝が大乗仏教の母胎とか源流であるといわれるのは、『華厳経』の「浄行品」や『ウグラダッタ・パリプリッチャー』すなわち『郁伽長者所問経』などの記述からですけど、これもよく調べてみますと、どうもそれらの古い方の本には仏塔崇拝はあまり出てこないで、仏塔が深く関係してくるようになるのは、後になってであることが分かりますね。大乗仏教徒は初めは仏塔に距離を置いたのではないか、とこのように私は考えています。大乗仏教徒は最初仏塔から離れたが、後で仏塔を引き込み吸収した。そのように推定して、大乗仏教と仏塔崇拝との関係をわたしは目下のところ考えてみています。

『郁伽長者所問経』では、在家の菩薩たちが僧院のなかに入って、仏塔を礼拝して、「私も仏陀のようになりたい、そして他の人々を救いたい」といって誓願をなしているのは、後の訳本、チベット訳本とか『十住毘婆沙論』に引用されたところとか、康僧鎧訳の『大宝積経』の「郁伽長者会」などの諸本のなかに出てくるのであって、安玄とか竺法護とかが訳した古い本には、そういう記事が全然ないんですね。

そもそも仏塔のあるところは、賑やかな場所なんですね。そういうところに菩薩は行くべきではない。在家の菩薩も出家すべきで、出家した菩薩は山のなかに隠れて住み、孤独であるべきだ、ということが繰り返し強調されているんですね。僧院にでさえ近づくべきではなく、用事のある時だけ来て、住んでも心は山中に向けられているべきだ、というんですね。大乗仏教徒は、最初はそのように、仏塔などとは離れたところに自分たちの生きる場を見出だした、といえると思うんですね。

大乗仏教といっても、いろいろな生き方、行き方があったわけで、大乗仏教の母胎や源流が仏塔崇拝にある、と一律的にみるのは私は大いに疑問なんです。部派仏教の方でも非常に仏塔崇拝に熱心であって、特に説一切有部や法蔵部などでは顕著です。また大衆部のなかの出世間部に属する僧が、仏塔信仰のありかたを非常に詳しく説いた経典を八世紀頃に出したりしていますね。

最後に、私は大乗仏教に関していいたいことがあるんですね。それは、「大乗、大乗と威張るな大乗」といいたいんです。大乗とは、本当は大乗とか小乗とかにこだわるのをやめるのが大乗なんですよね。大乗だと威張って小乗をけなすのは、部派の一つに留まるものであって、本当の大乗じゃないですね。大乗と小乗と対立するもんじゃなくて、大乗や小乗の両者を超えるのが本当の大乗ですね。そういうのが、空の行き方なはずですよね。でも大乗仏教の実態は、部派の一つに留まっていたし、大乗仏教内にも部派が沢山出来ていたように思います。

お粗末な話をお聞き下さり、ありがとうございました。

付記

講演会の話でいい足りなかったところ、いい間違えたところなど、多少修正加筆した。講演会の際に皆さんに話の内容の項目を示すコピーを配布したが、話の理解の助けになると思うので、それをここに掲載させていただく。

Ⅰ　仏塔の生成――謎多きもの
　1　舎利供養および仏塔建立の特異性
　　（1）舎利へのこだわり
　　（2）転輪聖王の葬儀――王墓の非存在
　2　仏塔に先行するもの
　　（1）シュマシャーナ・カラナ（方形の墓、アスラの円形の墓）
　　（2）柱か円墳か
　　（3）聖火壇と仏塔

Ⅱ　信仰の展開――仏陀を慕いて

1　舎利八分伝説
（1）フイクション性
（2）史実性
2　アショーカ王およびナーガ族と仏塔
（1）善い祭り――ストゥーパ祭り
（2）ナーガ族――舎利信仰の先駆者
3　信仰の意味
（1）現世利益
（2）心の浄化・生天
（3）涅槃の獲得
（4）菩提行・誓願行・成仏

4　比丘・比丘尼たちと仏塔信仰
（1）仏塔信仰は比丘たちに禁じられたのか――隋犯隋制
（2）在僧寺造塔戒
5　仏塔と僧院――西インドの石窟寺院を例に
（1）塔院への僧たちの進入――僧房つきの塔院
（2）僧院への仏塔の持ち込み――仏塔を付設する僧院
6　仏塔信仰と大乗仏教
（1）大乗仏教徒のあいだの種々相
（2）部派仏教と仏塔信仰